

■活動レポート

■事業紹介

古文書入門講座と古文書解読会

時田里志（主任専門学芸調査員）

ミミズがはったような昔の文字が書かれた古文書。「読みなれた人は、同じ日本語だから慣れれば読めるようになると思うけど、とても“同じ日本語”とは思えない記号や模様ですね。」入門講座の初日、参加された方から、こんな声がよく聞かれます。

たしかに、縦書きの古文書を横にしたら、まるでアラビア語！。でも、よく見てみれば知っている漢字やひらがながチラホラとあります。それを手がかりに、あとはパズルを解くように、読めない文字を「予想」していきます。古文書とのお付き合いは、こんな感じでスタートします。

1. 古文書入門講座

当館では、古文書解読の経験がない方を対象に入門講座を毎年開催しています。6～7月と10～11月に、それぞれ土・日6回ずつ連続で、合計12回の講座です。以前は月1回の通年事業でしたが、1回休むと2ヶ月間古文書から遠ざかるので、3年前から初夏と秋の集中講座に切り替えています。

テキストは、主に江戸時代の寺子屋の教科書です。最初は、小学1年生にもどった気分です。講師が読んであとに続いてみんなで音読です。“同じ日本語”ですが、江戸時代の言い回しに慣れることから始めます。「～にごさそうろう」「～らるるなり」

言い回しに慣れたところで、文字の勉強です。まずは平仮名ですが、なかなか大変

です。たとえば、私たちが使っている「に」は、「仁」という漢字の草書体から生れた文字です。ところが、江戸時代には「耳」「尔」「丹」などの草書体も「に」の平仮名として使用します。他の文字も同様で、同じ音に3～4種類の文字が使われているのです。

次は、講師が準備したプリントです。テキストの古文書を活字で読んだものですが、ところどころに空欄があります。受講生の皆さんは、悪戦苦闘しながら書き込んでいきます。「書き込んで完成した文を読んでみて、不自然だったらあやしいですよ。」講師の声に、あわてて消しゴムを動かす人も…。

こんな感じで、各回1時間30分の講座が進んでいきます。最終回のアンケートに、「古文書ファンになりました」「継続して歴史の勉強をしたい」などと書いてあると、講師冥利につきます思いです。

2. 古文書解読会

開館翌年からスタートした事業で、古文書解読の経験者を対象としています。月1回、5～2月の10回の開催です。今年度は後三年合戦の様子を記した「奥州後三年記」をテキストに、10時～12時の2時間の講座を行っています。

講座の最初は、入門講座同様に講師のあとに続いての音読です。さすがは経験者。自信を持って大きな声で読み進め、時折、講師の読み間違いを指摘する声も上がります。合間に単語の意味や登場する衣装や武具の解説を交えながら、1時間程度の全体学習を行います。

続いて40分間のグループ学習です。今年

度の解読会は、わかりやすい現代語にすることに挑戦しています。グループごとに解読とともに現代語訳を行い、当番のグループは最後の20分でその訳を読み上げます。

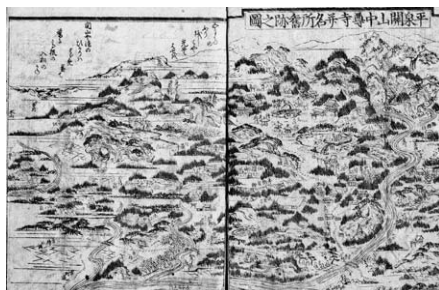
古文書解読は、書かれた文字を読むことですが、意味がわからなければ歴史的な事実をつかむことができません。現代語にすることは、古文書解読にとって必要不可欠な要素といえます。ところが、この作業は実に大変です。単語の意味を調べ文法的なルールに従うという、大学受験生の古文の勉強のような作業を行わないと、現代語訳がまったく意味の通じないものになってしまうからです。受講生のみなさんは、くずし辞典とともに、国語辞典や古語辞典を駆使して、より正確な意味の把握に奮闘しています。

3. 古文書の楽しみ

何ととっても、その文書を書いた人と会話が楽しめる楽しみは格別です。読むことで、文通しているような気分になり、まるで歴史の当事者になったかのような錯覚を覚えます。

最近では年賀状も手紙もパソコン作成のものが大半で、手書きの文字に触れる機会が随分少なくなりました。こんな時代だからこそ、パソコンやワープロがなかった時代の「筆跡」に触れることも古文書の魅力といえるのかも知れません。

来年度の開催日程は未定ですが、4月には決定します。まずは入門講座に参加して、歴史に直接触れてみませんか。



入門講座のテキスト「平泉往来」



入門講座の講師・原田学芸員



古文書解読会のグループ学習

■活動レポート

■学芸員室より 「どよう探偵団」に参加して

原田 祐参(学芸調査員)

県立博物館では小学生を対象とした教育普及活動の一環として、「どよう探偵団」が実施されています。これは、各部門の学芸員が専門的な内容について分かりやすく教えるものです。ただ話を聞くだけではなく、実際に実験したり、物を作ったり、探検したりと、「分かった!」を頭の中だけではなく、目に見える形で表現し、さらに理解を深め、興味を持ってもらうためのプログラムです。私も歴史部門の一員として、「どよう探偵団」に参加し、メンバーみんなの「分かった!・出来た!」のお手伝いをさせてもらいました。

今年度の歴史関連のプログラムは2つです。5月の「ミニ掛け軸をつくろう」では、ミニサイズのかわいい掛け軸を作りまし

た。江戸時代のお金を拓本にとり、掛け軸の中心部分に貼っていきます。おりがみを切ったり、台紙に貼ったりと、作業が多かったのですが、みんな立派に掛け軸を完成させることが出来ました。学芸員がカメラを向けると明るい表情で掛け軸を片手にピースサインを作っていました。9月の「盛岡城探検」

では、盛岡城跡公園を4班に分かれて探検しました。江戸時代に作られた盛岡城の地図を参考にしながら、約20カ所のチェックポイントを回って、問題を解いていきました。初めは学芸員のヒントを聞きながら、歩いて回ることが多かったのですが、昔の地図の見方に慣れてくると、場所を確認するスピードもどんどん速くなっていきました。それにつれて気づくことがらも多くなっていきました。石垣を見たときには、「こんな大きな石をどうやって積みあげた



盛岡城探検より

のだろう]、「どこから運んできたのだろう」という疑問がわき上がってきました。学芸員の説明に耳を傾けるみんなの目が輝きを増してくるのがはっきりと分かりました。

博物館では、普段は展示物の鑑賞が中心となります。しかし、好奇心の種はどこにでもあるものです。これからも「探偵団」のみんながその種を拾い、水をあげて大きな木に育てていくお手伝いが出来ればと願っています。

■解説員室より 「これなあに?」

藤嶋 マミ(解説員)

各展示室の展示資料の前に、山積みになった紙が置かれているのをよく目にしていると思います。また、展示室内で「この展示についての資料はありませんか?」という質問を受ける事があります。このような来館者の皆様からのご要望に対し、資料解説カード「これなあに?」をさし上げております。

「これなあに?」は、展示資料に隠されたたくさんの情報を知るための糸口を来館者に提供することにより、展示資料に対しての興味と関心を深めてもらうことを目的とし、来館者によりきめの細かいサービスを図ろうという趣旨のもと、平成3年10月から発行されています。発行日は毎月第1土曜日で、地質、考古、歴史、民俗、現勢・

生物の5つの分野から展示資料やテーマを一つ選び、わかりやすく解説しています。

毎月多くのお客様にご利用いただいておりますが、特に展示室がにぎやかになる7月から8月にかけては、子どもたちが夏休みのための資料として利用しているのが多く見受けられました。その中でも、学校から「昔の暮らしについて調べよう」という課題が出されて、そのレポートを書くために必要になった、ということがもっとも多い理由です。「昔の暮らし」と言っても、民家について調べたい、漁村の仕事で使われていた道具について調べたいなど、さまざまな分野があります。「これなあに?」をお渡しすると、「ありがとうございました!」と大きな声でお礼を言い、じっくりと読んで、展示資料と見比べながらノートに書き込みをする姿をよく見かけました。もちろん、展示資料について詳しく知りたいという大人の方にもご利用いただいています。中に

は、一つの分野に関する資料を全部お持ち帰りになれるお客様もいらっしゃいます。

また、私たち解説員が「これなあに?」の作成にあたることによって、今は化石となってしまった生物たちが生きていた頃の地球の様子や、その道具が使われていた頃の人々の生活など、展示資料に関するさまざまな知識を得る事ができます。そして、その知識を普段の解説業務に生かすことができるのです。

「これなあに?」には、見ただけではわからない展示資料についての情報がたくさん詰まっています。興味を持たれた方は、お気軽に解説員にお声をお掛け下さい。

